

「吳晗批判全集第一輯」

(輯自一九六五年至六六年全年上海文匯報)

「朱元璋評価問題彙編」

(輯自一九六五年全年上海文匯報)

油印本・楊開書報供応社

大沢 一雄

一九四九年の中華人民共和国の成立以来、中国の歴史学界はブルジョアの観念史観を払拭し、科学的な唯物史観を確立することを課題として、史学方法論、時代区分論、歴史人物の評価等々多岐に亘る問題をめぐり激しい論争を展開してきた。

そしてこれらの論争が、実証的な調査活動と相まって新しい成果を多く生み出したことは否定できない事実である。

しかし、ここで注意すべき点は、これらの論争や活動が単に歴史学者によって歴史学界の枠内においてなされたものでなく、中国の政治路線と深くからみあってその一端をにないつつ展開されてきたということである。

このような中国史学界の動向について述べることは本稿の目的とするところではないので、菊地英夫氏が指摘された点(1)を挙

げて、その特徴を示すに止めておこう。菊地氏によれば第一に、中国にあって歴史研究の過程自体が、研究者の自己改造の過程としての意味をもっているということである。

第二には「考古学に限らず歴史学の分野においても大規模な人員を動員してのフィールドワークが重要な研究手段となり、それがまた注目すべき成果を挙げている点」であり、第三は「知識・思想は大衆と結びついて変革への意志となり物質的力として機能してこそ意味があるとする点である。」

第二の点の「注目すべき成果」が必ずしも史学上の成果のみを意味する許りでなく、歴史工作を通じて得られる参加者の思想教育上の成果をも意味する点を併わせて考慮するならば、中国における歴史研究のもつ政治的な課題は明らかになるであろう。

一九五八年一〇月、陳伯達により提起された「厚今薄古・辺

干辺学」(今に厚く、古に薄く、実践しつつ学ぶ)という運動や、その具体化とみられる四史編纂運動(研究者が勤労大衆の中に入り、一緒になって集团的に企業、村、公社・家の歴史を編纂しようという運動)は、前述の中国史学界の在り方からみておこるべくしておきた運動といえよう。

このような中国歴史学界の潮流に従っていく限りにおいて歴史学上の成果乃至業績というものは、単に純学術上の問題として評価されたり、専門の歴史学者の批判のみに耐え得ればよいという態のものでなくなるのは当然で、歴史学上の成果・業績は研究者の研究上の方法論や、歴史観、さらに研究者自身の思想をも含めて大衆の批判にさらされなくてはならないのだというところが了解されるであろう。

ここで私が採り上げた標記二種の書物は、ともに歴史学者でもあり北京市副市長・中国民主同盟副主席でもあった呉晗に関する批判を集録したものであるが、一九六五年一月一〇日に上海の「文匯報」において姚文元によりはじめられた呉晗批判を皮切りに、世界を驚倒させた文化大革命が事実上開幕されたことを想起するならば、この二種の書物のもつ歴史的な意義は明白なものといえよう。

呉晗批判のはじめられた頃、史学上の論争が文化大革命にまで発展することを予想できた者はきわめて少なかったと思うが、前に述べた中国歴史学界の在り方からみるならば、その進行為が必ずしも全然予想しえない方向を採ったと考えることはできないであろう。

呉晗は一九〇九年、浙江省に生まれ、北京の清華大学を卒業し、その後同大学で明史を講じていたが、日華事変の勃発のため多くの教授、学生は奥地に移り、呉晗も北京・清華・南開の三大学の連合体として昆明につくられた国立西南連合大学歴史学科の教授となった。

その頃の彼の生活状態や思想上の変化については思想的自叙伝ともいべき文章「我克服了『超階級』観点」<sup>(2)</sup>にのべられている。

この文章は佐久間重男・小林文男両氏の訳編になる「新中国の人間観——歴史人物を中心として——」<sup>(3)</sup>の中に「歴史家の思想と学問——私の歩んできた道——」として収められており、比較的日本人にも知られたものと思われる。

中華人民共和国において、歴史人物の評価をめぐる盛んな討議が行なわれてきたことは既に述べたが、三国時代の曹操、太

平天国の李秀成の如き人物に対する論争は特に激しく、前者について発表された文章は千余編に及んだというが、歴史人物の評価の基準について書かれた専著や論文も多く、榮孟源の「歴史人物的評価問題」(一九五四年)、陳旭麓の「論歴史人物評價問題」(一九五五年)、嵇文甫の「關於歴史評價問題」(一九五六年)なども出版されている。新中国誕生以来、北京市副市長など、政治的に枢要な地位を占めるとともに、一方において、郭沫若を長とする中国科学院の出版にかかる「歴史研究」の創刊号より編纂者の一人として名を連ね、又、北京歴史学会会長として中国の歴史学界をリードしてきた呉晗が、多くの人物を採り上げて評価していたことは当然の事で、前述の朱元璋の他に竇建德、況鐘、周忱、于謙、海瑞、徐霞客、曹操、則天武后、談遷、等々数多くの人物に及んでいる。

これらの人物の中で、呉晗が特に関心を抱いたのは、彼の専門が明代史であったということにもよろうが、朱元璋と海瑞であった。前者は「朱元璋伝」(一九四九年)として世に問われ、その成立の経緯は前に引いた「我克服了“超階級”的觀點」にも述べられているが、後者についても数多くのものが発表されている。本資料集の「吳晗批判全集・第一輯」に収められた

「關於海瑞罷官の自己批判」によると、呉晗は(1)「海瑞罷皇帝」(一九五九年六月一六日人民人報に発表、後に「海瑞的故事」に編入)(2)「論海瑞」(一九五九年九月二日、人民日報に発表、後に「燈下集」一九六〇年六月刊に収む)(3)「海瑞的故事」(「中国歴史小叢書」一九五九年一月刊)(4)「海瑞」(「新建設」一九六〇年第二〇、二一期合併号と発表、後に「春天集」一九六一年一二月に収む)(5)「海瑞罷官」(一九六一年一月「北京文芸」に発表、北京京劇団により演じられ、後に序を加えて単行本として刊行)を発表している。(5)を除くとすべて一九五九―六〇年の間に発表されている。(5)は呉晗の初めての史劇として六一年に発表、上演されたものである。この「海瑞罷官」は一九六五年一月一日姚文元の論文「新作歴史劇『海瑞罷官』を評す」により批判されたが、次いで同じ姚文元により一九六六年五月一日日批判されたのが、「燕山夜話」および「三家村札記」である。(5)

前者は北京市党委員会書記鄧拓により「北京晚報」に連載(一九六一年三月―六二年九月)されたものであり、後者は前述の呉晗、鄧拓、北京市中ソ友好協会副会長・市党委統一戦線部長廖沫沙の三名により、雑誌「前線」に連載(六一年一〇月

一六四年七月)されたものである。

これら批判された者の肩書からみても、姚文元の批判が、北京市党委員会に向けられたものであることは明らかで、事態はやがて同委員会の改組へと進展することにより、所謂修正主義的実権派に対する活動的な総攻撃が、紅衛兵を先頭に公然と展開されるのであるがこの間の経緯は省略する。

しかし、以上の動きの最初の狙いが、北京市党委員会であり、その起爆剤の役を果たしたのが呉晗であったことは重要である。

姚文元の第一の呉晗批判である前記「新作歴史劇『海瑞罷官』を評す」により、一見学術上の論争とみえる問題の中に特定の政治的企図が指摘されたが、それはさらに姚文元の第二の批判、「三家村を評す」に至って明確な形でおし出されている。

第二の批判の中で姚文元は、「『三家村札記』の登場は、呉晗の△海瑞の免官▽の序言にきびすを接している。一九六一年八月、国内の反動階級が攻撃の手をつよめている矢先に、呉晗は、脚本の前書きのなかで『この芝居は、剛直でもおねらず、強圧に屈せず、失敗してももう一度やるという海瑞のつよい意志に重点をおいて書いた』ととくに指摘し、『官』を『免』ぜられた右翼日和見主義者がふたたび党に攻撃をくわえるようさ

かに激励し、支持した。……」とのべている。(6)

一九五八年に人民公社化が開始され、社会主義化が強くおし出されたが、五九、六〇、六一年と三年連続の自然災害のため、公社の末端組織である生産隊を経済計算の単位としてみとめたり、劉少奇の「三自一包」政策が打ち出され、個人経済への逆行を意図するなど各種の調整を加えざるをえなくなったが、このような動揺に乗じて右翼的勢力が抬頭してきた。さらに五九年九月一七日には国防相彭德懐、参謀総長黄克誠らが、反党活動のかどをもって解任されるという事態が発生した。

かかる時期に呉晗は海瑞という、階級的立場から云えば封建階級の代弁者にすぎない明代の官僚をとりあげ、その時代的役割を強調し、絶対権力者嘉靖帝を批判して獄に下された事実を挙げ、それを清官として高く評価したのであるから、これが毛沢東と対立罷免された彭德懐らの復権を要求し、左翼日和見主義者を激励するものという批判がなされる余地は充分にあったといわなければなるまい。この段階において海瑞論はすでに史学の範囲をこえて、政治的立脚地の如何を問う、政治的問題にまでエスカレートしてきたといえるだろう。

このように呉晗批判の深化が、文化大革命の展開と深いから

み合いをもっていることを考える時、吳晗についての批判資料集である「朱元璋評価問題彙編」「吳晗批判全集 第一輯」の二著が、単なる歴史的なドキュメントである許りでなく、現代の中国の政治を知る上で、きわめて重要な意味をもつ資料であることが知られよう。

「吳晗批判全集」については、まだ第一輯を入手したにすぎず、全体の構成について云々することはためられるが、前記姚文元の「新作歴史劇『海瑞の免官』を評す」、および「三家村を評す」などの重要な資料が掲載されていないことは、本資料集の最大の不備といわざるを得ない。事の経過からみても当然第一輯の冒頭におかすべき資料である。

ただ、中国の政治の動向に強い関心をもちながらも大陸からの資料の入手にきわめて困難を感じている我々日本人研究者としては不備をかこちつつも此の種の出版の意義を高く評価せざるをえないのである。

次に、これら二著の構成およびその概要を紹介しておく。

#### 吳晗批判全集 第一輯

○關於「海瑞罷官」的自我批評（一九六五年一月三十一日）

上海文匯報第二、三版）本書三頁—三三頁

これは第一輯の中心をなす吳晗の自己批判で、姚文元の批判にこたえんとすものである。吳晗は、海瑞論を展開するにあたり「古を今の用となす」今に厚く、古に薄く」という原則について（執筆——筆者）当時、少しも想い至らなかった。完全に古のために古を、戯曲のために戯曲を書き、政治を離脱し、現実を離脱してしまった。これは資産階級思想にみちびかれたもので、無産階級の思想によってみちびかれたものではなかった。無産階級の文学、芸術はすべて必ず当面の政治のために服務すべきであるという動かすべからざる原則を完全に忘れ去っていた」とし、さらにその研究のために「階級分析の方法を用いず、一を分かちて二と為す科学的方法を用いず、歴史唯物主義を用いて正確に人物と事件を評価することなく、用いたところのものは形式主義的方法であり、一方的、絶対的、主観的に海瑞と農民群衆を描写した。これは思想の問題であり、同時に階級的立場の問題であった。私の錯誤はきわめて重大である<sup>(8)</sup>」ことを認めた。

○評吳晗同志所謂「自我批判」 楊寬（一九六六年三月四日上海文匯報第四版）本書三四頁—四六頁

歴史学者である楊寬は、吳晗の自己批判は自我批評と称する

だけで、実際上は反批評であるとし「海瑞罷官」を分析し、吳晗が前に犯した誤りをそのまま堅持して、歴史的眞実を歪曲するやり方を依然として改めていない旨指摘し、「最初私は『海瑞罷官』の政治的企図に対して認識が明らかでなかったが、学習を経て討論に参加することにより次第に明らかになった。すなわち、一定の階級闘争が尖鋭複雑な形勢下にあつては、資産階級は目につきやすい大胆な攻撃方法をとらず、古を借りて今を諷する」という手法によって悪毒な攻撃をしかけてくるということである。これは（海瑞罷官）古を借りて、今を非とする、社会主義の流れにさからおうとするものの代表作で、間違はなく、一つの毒草である<sup>(9)</sup>といている。

○吳晗的反動創作動機必須批判 江俊峰（一九六六年四月一五日上海文匯報第四版）本書四七頁—五四頁

○上海學術界部份人士座談吳晗的「關於（海瑞罷官）的自我批評」（一九六六年一月七日上海文匯報第四版）本書五五頁—七一頁

これは六五年十二月三日に行なわれた上海文匯報の主催する座談会の記録で、参加者は十余人に及び周谷城、張家駒、劉大杰、楊寬・魏建猷等著名の歴史学者が名を連ねている。

これら参会者が吳晗の自己批判について自己弁護であり、眞の批評ではないとする点において共通の立場をとっているのは当然であろうが、周子同のようにやや同情的な見方も興味深い。

しかし、清官と貪官をどう評価するか、これを一つ穴の貉とみるか、清官は貪官よりもさらに更に悪い歴史作用をもたらすものとみるべきか、この点について明確な意見の統一はみられない。寧ろ、後の課題として残されていると考えるべきだろう。

○吳晗投靠胡適的鉄証——一九三〇年至一九三二年吳晗和胡適的来往信件（一九六六年六月四日上海文匯報第三版及第四版）本書七三頁—一〇四頁

これは右記年代中に吳晗、胡適間に交わされた書信を集めたもので胡適宛一通、吳晗宛二通、附録一通よりなり、これに若干の編者の批判が加えられている。内容的には法顯の仏国記や紅樓夢、吳之器の胡応麟伝に関する疑問、四史人名索引作成上の問題点などについて吳晗が胡適に教えを乞うたもので、胡適の返書もおさめられている。この資料によると吳晗がこの時期に深く胡適に傾倒していた様子や、胡適が、吳晗の学者としての能力、業績を高く買っていた様子が窺われる。

呉晗は「先生の御多忙はよく存じていますが、ただ、実のところ先生を除いて、先生よりもさらによく科学的方法を用いて問題を解決し、行くべき徑を指導して下さるような方は思いつかないのであります」とのべており、また、附録の、胡適から清華大学代理校長と教務長に宛てた書信中、胡適は「彼は非常に成績のよい学生であり、中国の古い文学、歴史についての基礎的知識もきわめてしっかりしている。いくつかの研究があるが、すべて大変みるべきものである<sup>(11)</sup>」と称揚している。中華人民共和国になってからの激しい胡適批判を想起してみれば、胡適との、これら往復書簡が発表されたことはある意味では、

「海罷瑞官」に対する批判以上の致命傷となったであろう。

○請看呉晗解放前站穩了什麼立場！ 中而勇（一九六六年五月八日上海文匯報第三、四版）本書一〇五頁—一二八頁

これは前の胡適との往復書簡をとりあげて、これを端著として、呉晗の解放前の行動を徹底的に暴露した、今まで挙げた資料に比して極めて激烈な、感情的な文章といえよう。彼は「呉晗は三〇年代のはじめより胡適のいう『科学救国』という反動路線の忠実なる信徒であり、一貫して人民革命に敵対する立場を占めてきた。二〇年前、まさに人民解放戦争が始まり、革命

と反革命の決戦が行なわれんとした時にあって、彼は資産階級右翼の代表となって、直接反動的政治闘争に参加し、第三の道をすすもうとしたのである<sup>(12)</sup>」ときめつけ、三〇年代の彼の文章をあげて、そのことを実証しようと試みている。

詳細に触れることは避けるが、彼の挙げる呉晗の罪悪は三つの綱目のもとに整理されているので、この三点を挙げておこう。

(一) 死心塌地投靠胡適，以『學術研究』為名，參與反動政治。

1、巴結胡適，得到賞識

2、惡意中傷抗日救亡運動

3、向蔣介石毛遂自薦

(二) 適応蔣介石『攘外必先安内』的反革命政策，為蔣介石提

供反動統治的歷史經驗。

1、要蔣介石及時撲滅革命力量

2、為反動統治的『長治久安』獻策

(三) 反共，擁蔣，親美，一心要走資產階級專政的道路。

1、站在蔣介石反共政策一辺

2、吹捧中国人民的死敵美帝国主义

3、打出了『第三條道路』的旗号

4、把美英民主吹得天花乱墜

以上紹介の六編が第一輯の内容であるが、呉晗の自己批判がさらに反批判にまで発展し、その批判が、益々きびしさを加えていく様子と、その問題点がこの一輯からだけでも充分にうかがうことができ、現代の中国研究者にとり有益な資料であるといえよう。又、中国現代史研究家以外の者にとっても中国知識人の考え方、学問と政治の関係などを浮彫りにして示してくれる資料として興味深い。上海文匯報のみならずさらに広範な呉晗批判に関する資料が蒐集、刊行されることを願うこと切なるものがある。

「朱元璋評価問題彙編」は呉晗の代表作の一つ「朱元璋伝」についての批判を収めたものであるが所収の四編の論文(後述)は最初の一編を除いては姚文元が「海瑞罷官」についての批判を発表する以前に発表されたものである。しかし、最初の第一編も同書の副題に「一九六五年全年」の上海文匯報より輯したとある点、さらに、その比較的隠当な内容からみて発表年次を一九六六年としてあるのは誤りで、一九六五年とすべきだろうと思われる。ところでこの本集の内容は「批判全集」に比較して史学上の論争としての性格を強くもっており、われわれ歴史を学ぶ者にとっては興味深い資料集といえよう。

○朱元璋蛻化變質的原因是什麼——与吳晗先生商榷——謝李  
(一九六六年九月二三日上海文匯報第四版)本書三頁—一二頁  
明の太祖朱元璋が漢の高祖劉邦とともに、低い身分から出て皇帝となったことは知られていることであるが、この紅巾軍という農民を主体とした革命的反元朝勢力の中から生まれた朱元璋が、次第に農民のもつ革命性をかなぐりすてて、残酷、狡猾な封建的君主へと変質していく過程を主として問題としたものである。

呉晗は「朱元璋伝」において、朱元璋の呉国の政権が李善長、陶安等知識人の参加を受け容れた時より変質ををはじめ、劉基、宋濂、葉琛等の地主階級が参加するに及んで、その変質は急速の度を増したとしている。評者である謝李は、この見解に一応同意しているが、ただ、その変質の原因について呉晗は同書において「この種の変化は階級の本質により決定されたものである。農民は小土地所有者で、勤労、素樸で、一生飢餓線上にあってさまざまっており、残酷な圧迫、搾取に遭遇すると、彼等は必ず奮いたって一身を顧みずに立上って反抗するが、反面、彼等は小私有者的な一面をもっている。彼等はより多くの土地を所有することを渴望しており、幸いにしてよく勝利をえ



た後にあって、彼等中間の功をたてた將領たちは変化してしま  
い、彼等が前に断固として反対をした地主階級になってしま  
うのである。事のなりゆきは、彼等を彼等自身と反対の方向へと  
進ませるのである」といつている。

謝李の反対するのはこの点についてである。謝李の主張は次  
の通りである。朱元璋は佃農の出身であるとはいっても一七才  
で両親、長兄を失ない、佃農としての生活を送った期間は極め  
て短かく、ほとんど無意識の中にすごしてしまったといつてよ  
い。又、一七才から二五才で農民起義軍に参加するまでの幼年  
期に比較して、さらに重要な時期は僧としてすごしている。

僧といつても種々のタイプがあり、同時期の彭瑩玉のように  
革命思想を普及するために東奔西走するものもあったが、朱元  
璋の場合は富戸の扉を叩いて生を計るといつた生き方をしてい  
たのであるから、強固な革命性というものが養なわれる余地が  
ない。朱元璋の生き方は游民としての生涯である。「貧しい僱  
農の階級性と、游民の階級性とは本質的に異なるものである。  
貧しい僱農の革命性は強く、勇敢、忠誠、素樸で、歴史上、多  
くの傑出した農民起義の領袖はすべて、この種の思想品德をも  
つていた。游民は勇猛に闘争するといつても、それは投機、

狡詐、權勢慾の強烈等という特性をもつている。朱元璋がやっ  
たことをみてみると、彼の階級的な属性は貧しい僱農ではなく  
て游民である。<sup>(13)</sup>」

謝李はこのような主張を朱元璋の経歴についての分析を通じ  
て証明することを試み、さらに、出身家庭が一個人に対して与  
える影響はきわめて大きい、人によっては生活経験の変化に  
したがって、その人の階級性というものが、出身家庭の属して  
いた階級と一致しなくなってしまふ場合もあり、朱元璋はその  
例であるとして、その游民性が、農民起義領袖から封建的皇帝  
に変質した根拠であると結論している。

謝李は、「我々は農民階級にこの種の局根性（＝小私有性・  
分散性と自発性——筆者）を認めるものであるが、我々は誤つ  
た観点をもつてそれを解釈しようとすることに反対するもので  
ある。農民階級が地主や官吏になることを希望しているから、  
農民革命が一度成功するや、ただちに農民起義の領袖が地主分  
子に変化すといふこと、および、このことが農民階級の本質に  
より決定されるものであると認めることは、一つの誤つた観点  
である」と指摘している。<sup>(14)</sup>

以上の解説から明らかなように、謝李は朱元璋の政權の変質

を、朱元璋自身のもつ、游民性によって説明し、それが呉晗の  
いうような農民階級自身のもつ階級的な弱点によるものではない  
ということ強調しているのであるが、あくまでも冷静に事  
実によって主張するという態度が一貫しており、また、史学上  
の論議として展開されているので、我々第三者からみても納得  
のゆく——一つの見方として——ものがある。私自身としては  
農民性と游民性というものを謝李のように截然と区別しうるも  
のかどうかという点に疑問をもつ。游民性というものは、寧ろ  
封建社会にあっては農民の一つの属性として考えるべきではな  
いだろうか。

○也談朱元璋政権性質的轉化問題 徐連達（一九六五年一〇月  
二一日上海文匯報第四版）本書一三頁—二三頁

この論文は直接呉晗の論文に対する批判を加えたものではな  
く、その目的は「朱元璋の政権の性質と轉化の問題に関して、  
近年来、新聞紙上相次いで討論的な文章が発表されており、私  
個人としても些か考えるところがあるので、その点を発表し  
て、討論に供しようとする」ことにあるとしている。

徐連達は第一に紅巾軍出身の朱元璋が江南に建設した政権は  
地主階級に掌握された、地主階級のために服務する政権であつ

たと規定し、その理由を六条に亘り例とともに列挙している。

一、朱元璋政権が、地主階級に対して鎮圧的態度をとらず、  
むしろ、これを歓迎して、その政権下に集め、これと協同し  
て、積極的にこの階級を利用したこと。

二、朱元璋が政権樹立のために利用した軍隊の殆んどが、地  
主階級の軍隊で農民軍でなかったということ。

三、朱元璋の政権と軍隊は地主階級の社会秩序を維持し、彼等  
の生命と財産の安全を保障するためのものであったというこ  
と。

四、朱元璋の江南政権は、その統治する区域内において起き  
た農民起義に対して、これを傘下に収め、招撫するという政策  
をとらず、これを消滅させ、鎮圧するという態度をとったこ  
と。

五、朱元璋の江南政権は元末以来重大な問題となっていた土  
地関係について、根本的な改革を加えてなかったこと。

六、朱元璋の江南政権は紅巾軍が元朝政府やその文武將吏に  
対して徹底的に闘争して妥協しないという立場をとったのに反  
して曖昧な立場をとり、自己の政権保全のために妥協をも敢え  
てしたこと。

除連達は右の六つの点が江南政権の全存統期間を通ずる特色であったことを指摘し、なぜ朱元璋がそのような地主階級の利益代表になったか、またそれは時期的に何時のことであったかという点について議論を展開している。

除連達は朱元璋が皇覺寺でその前途を占った上で紅巾軍に投じたという事実をとりあげ、「彼が起義に参加するに当り、明確な政治的方向というものがなく、『本と自全を図る』ことと

「保身の計」をはかるにとどまった」という点、《国初事跡》に載せる朱元璋の「我与爾等同起濛梁，望事業成，共享富貴」という言葉から、朱元璋の階級性の曖昧さを指摘した上で、至正一四・一五年の間に滁・和を占領した時をもって朱元璋政権の変質がおこったとしている。この時に地主階級・知識分子が朱元璋に加わり、朱元璋をして、農民起義の領袖に甘んずることなく、封建的皇帝への途を志向せしめ、農民軍には階級闘争を放棄させ、その革命運動の方向を地主階級の利益と一致する方向にむけるべく画策したとしている。

これらの点から除連達は次の結論を出している。

一、朱元璋は起義に参加したが、彼の階級性は確固たるものではなく、その上、多いか少ないかわからないが個人的に富貴

を望む欲望をもっていたこと。

二、朱元璋の転化は軍事的に権力が拡大したことを客観的基礎とし、皇帝とならんとする潜在意識を内的要因とし、地主階級の滲入を外来の誘因として急速化していったこと。

三、朱元璋は既に滁・和にあって彼の基本的政治方向を確立しており、彼の政策が地主政権として転変したのは、この時期にあること。

四、彼の渡江前に既に朱元璋は変質しており、渡江して金陵に政権を樹立した後における思想上の変化とみえるものはただ量的な変化というべきものであるということ。

五、江南政権が地主政権であるというのは単に地主階級が多く政権に参与したということだけでなく、同時に農民起義軍が富豪地主階級に打撃を加えるという政策を放棄したことを意味するということ。

かかる除連達の主張を概括してみても、特に新味のある見解を見出すことは出来ないし、呉晗の見解と比較してみても基本的な相異は認められない。

○《朱元璋伝》読後 謝天佑（一九六五年九月一六日上海文匯

報第四版）本書二五 — 二八頁

謝天佑は「朱元璋伝」を読んで、読者は呉晗先生が、全面的、系統的、熟練的に原資料を掌握した基礎の上で同書を書かれたものであることを了解するであろう。……呉晗先生の朱元璋伝を読んで、少なからざる事を学び、少なからず啓発を受けたが、しかし、この呉晗先生が書かれたところのこの本の中にもまだもう一步すすめた研究が必要な問題がいくつかある。真理を認識するということは逐次深さを加えていく過程である。この精神によって私は気付いた問題を提出して呉晗先生の教えを乞うとともに、読者の討論に供しようとするものである」として二つの問題点を指摘している。

第一は既に紹介した、謝李の論文においても問題になった朱元璋が封建皇帝に変質した原因が何であるかという点で、それを農民階級の階級性によるとする呉晗の見解をとりあげている。

謝李は游民性という概念をもってこの問題を解こうとしたのに対し、謝天佑は自分自身の考えはのべていない。ただ、劉基、宋濂ら大地主たちの影響により朱元璋政権が封建化したとする史学界の伝統的な見方には疑問を提出し、さらにこの問題についての討論を深化することを要求しているにとどまる。第二点

は呉晗が朱元璋伝一七八頁から一七九頁の間でのべてい小地主階級の両面性ということである。

呉晗は、地主は封建政権に依存する一面と同時に小民を欺凌する一面をも併わせ持っているとしているが、謝天佑は封建政権の下にあって、地主が農民を搾取、圧迫しないことはありえないのであるから、この両面性を改めて指摘する意図は理解し難いとしている。このような階級性の理解についての曖昧さから生じて来る問題点として朱元璋伝で、朱元璋は大地主が農民を搾取圧迫している点を認識していたので、自己政権を中地主層の基礎の上に樹立し、農民に対しては譲歩し、大地主階級に打撃を与えたとしている呉晗の見解をとりあげて、一、朱元璋政権は全地主階級の代表か、それとも中小地主の階級の利益のみを代表する政権であるのか、二、朱元璋の独裁政治は呉晗のいうように“違法的大地主”に対するものなのであるかどうか、三、朱元璋の家施した地籍や戸籍の整理は主として大地主に打撃を与えるためのものであるのか、それとも再び封建統治秩序をうちたてるためのものであったかという三つの疑問を提出している。

○是失敗還是勝利 —— 对歷史上農民戰爭的一点看法 ——

范大声（一九六五年六月三〇日上海文匯報第四版）本書二九頁—三一頁

これも特に呉晗の見解を批判したのではなく、農民戦争における勝利と敗北というものが歴史的にどんな意味をもつものであるかということを経史的の農民戦争を例にして論じたものである。范大声は先進階級（プロレタリアートを指す——筆者）の指導を受ける前にあって農民戦争の絶対的な勝利はありえないが、「しかし、農民戦争は封建社会で一定の範囲内においてであるが、封建的な統治を弱体化し、旧時代の搾取関係に打撃を与え、局部的に生産関係と生産力の矛盾を調整して、社会的生産力の発展を促すものである。このことは（農民戦争のもたらず）一種の勝利といえるであろう」として新の王莽時代末期の農民戦争や唐の黄巢の乱、元末の朱元璋を例に挙げている。朱元璋について、彼は「元末の農民起義領袖朱元璋が変質して封建皇帝となったのは（農民戦争の立前から観れば）一種の失敗であるが、元朝の残酷な統治を打倒して、一定範囲内において社会生産力の発展に対する障碍を除いたことは、一種の勝利である」と述べている。

この例のように、「すべて失敗の中に勝利が内包されてい

る」<sup>(19)</sup>が、封建時代における勝利には自から限度があり、あくまでもその勝利は先進階級の領導をまたねばならぬと結んでいる。

以上簡単ながら「呉晗批判全集——第一輯——」と「朱元璋評価問題彙編」の二本について、その出版の意義を述べ、内容について紹介をしてきたが、両書を併わせみることによって文化大革命の契機となった姚文元の呉晗批判に至るまでの経過が知られると共に史学革命から文化大革命にまで拡大した問題点の所在が知られるであろう。

注(1) 菊地英夫「中国歴史学界における思想運動と史学理論」中国研究月報一九八号一〇—一三頁、昭和三九年十一月

(2) 呉晗「春天集」に収められている。一九六一年一二月作家出版社出版

(3) 佐久間重男・小林文男訳編「新中国の人間観——歴史人物を中心として」二—二四頁 勁草書房一九六五年七月

(4) 菊地英夫「史学革命の展開と文化大革命」（福島正夫編「中国の文化大革命」お茶の水書房一九六六年一一

月所收)の「歴史人物評価問題」の項に曹操、李秀成批判についての紹介がある。

- (5) 「夜話」および「札記」の部分訳は毎日新聞社「燕山夜話・付三家村札記」昭和四十一年九月に収められている。又、同書には姚文元の批判「三家村を評す」という文章も転載されている。

- (6) (5)の毎日版「燕山夜話」二七二—二七三頁附編姚文元「三家村を評す」

- (7) 批判全集六頁“古為今用” “厚今薄古”の原則在當時一点也沒有想起過，完全是為古而古，為寫戲而寫戲，脫離了政治，脫離了現實。是資產階級思想在指導着，而不是無產階級思想在指導着。無產階級的文学，芸術都必須為當前政治服務的不可動搖的原則，完全忘記了。

- (8) 前掲書 二二—二三頁——沒有用階級分析的方法，沒有用一分為二的科學方法，沒有用歷史唯物主義來正確地評價人物和事件，而用的是形式主義的方法，片面地、絕對地、主觀地來描述海瑞和農民群眾，這是思想問題，也是階級立場問題，錯誤是嚴重的。

- (9) 前掲書四四頁 最初我对△海瑞罷官▽的政治企圖是認識不清的，經過學習和參加討論，就越來越明白：這是在一定的階級鬥爭尖銳複雜的形勢下，資產階級不採用明目張胆的進攻方式，而採用“借古諷今”的手法來發動惡毒的進攻。這確是借古非今的反社會主義逆流的代表，確是一棵毒草。

- (10) 前掲書七八頁 明知先生現在很忙，不過除了先生以外，我實在想不出一個比先生更能用科學的方法來解決和指導路徑的人。

- (11) 前掲書一〇三頁 他是一個很有成績的學生，中國舊文史的根底很好。他有幾種研究，都很可觀。

- (12) 前掲書一〇五頁 吳晗從三十年代開始就是胡適的“科學救國”反動路線的忠實的信徒，一貫站在人民革命的敵對立場。二十年前，正當人民解放戰爭開始，革命和反革命決戰的時候，他作為資產階級右翼的代表，直接參加反動的政治鬥爭，要走“第三條道路”。

- (13) 朱元璋評價問題彙編四頁 貧僱農的階級性與游民的階級性有本質的不同。貧僱農革命性強，勇敢、忠誠、樸實，歷史上許多傑出的農民起義領袖都具有這種思想品

德。游民雖然鬪爭勇猛，但是具有投機、狡詐、權勢慾強烈等特性。從朱元璋的所作所為來看，他的階級屬性不是貧僱農，而是游民。

- (14) 前揭書一一頁 我們承認農民階級有這種局限性，但，我們反對用錯誤的觀點去解枳它，認為農民階級希望当地主、当官吏，因此農民革命一勝利，農民起義領袖就蛻化為地主分子，并認為這是農民階級本質決定的，這是一種錯誤的觀點。

- (15) 前揭書一三頁 關於朱元璋的政權性質和轉化問題，近年來，報上曾陸續發表過討論文章。個人也有一些想法，把它提出來，以供討論。

- (16) 前揭書二五—二六頁讀了▲朱元璋傳▽，讀者還會了解到，吳晗先生寫這本書是在全面、系統、熟練地掌握原始資料的基礎上寫的。……讀了吳晗先生的▲朱元璋傳▽，學到了不少的東西，得到不少啓發，但是，在吳晗先生所寫的這本書中還有些問題值得進一步研究。認識真理是一個逐步加深的過程。本着這種精神，我想把我所想到的問題提出來，向吳晗先生請教，供讀者討論。

- (17) 前揭書三〇頁 「但是，農民戰爭在封建社會的一定範圍

內，削弱了封建統治，打亂了舊有的剝削關係，局部地調整生產關係與生產力的矛盾，促進了社會生產力的發展，却又是一種勝利。

- (18) 前揭書三〇頁 元末農民起義領袖朱元璋蛻化為封建皇帝是一種失敗，但推翻元朝的殘暴統治和在一定範圍內掃除社會生產力發展障礙等却是一種勝利。

- (19) 前揭書三〇頁 都是在失敗裡面包含着勝利的。

(一九六九年七月三〇日脫稿)

〔追記〕 本稿の校正後▲吳晗批判全集▽第二輯が手許に届いた。時間と紙幅の余裕がないのでその紹介は後日にゆずるが、一応、所収論文および執筆者を次に挙げておく。

一、論海瑞 吳晗

二、海瑞的故事 吳晗

三、用革命的辭証法徹底批判反黨反社會主義的毒草 学

錄

四、▲海瑞罵皇帝▽和▲海瑞罷官▽是反黨反社會主義的

兩株大毒草，閔鋒，林杰

五、▲海瑞罷官▽代表一種什麼社會思潮？ 方求